

ローマ、ビジョンを確立する - 第十六号

最後の試練：ローマの象徴性と預言の三重の適用を理解する

Jeff Pippenger

2024-09-04

ローマの象徴をめぐるこの最終的な論争で誤った側に立つ者たちは、預言を三重に適用するという誤った用法に頼っており、321年と538年、そして間もなく米国で制定される日曜遵守法という三つの日曜遵守法によって三つのローマが定義されると示唆している。その結果、彼らは自らが選び取る原則と預言史に誤った偏向を与えてしまうが、これはヨエル書の四つの虫をめぐる論争でも同様に行われたことである。ヨエル書の最初の六節では、四世代に続いて四種類の食い荒らす虫が登場し、神の民が四世代にわたって段階的に壊滅させられていくこと、そしてその壊滅が、アドベンチズムがローマの神学と背教的プロテスタント主義を受け入れたことによってもたらされたことが示されている。

現在の論争において、日曜法を用いて三つのローマを定義しようとする者たちは、神の預言の言葉には実際に四つの日曜法が示されているという真理、さらに西暦321年はアメリカ合衆国で間もなく制定される日曜法を表していること、そして538年の日曜法は世界のすべての国々に強制される日曜法を予表していることを避けている。四つの日曜法があるという事実は三つの日曜法を示すものではない。とりわけ、預言の三重適用における第三の現れが最終成就を表すときにはなおさらである。アメリカ合衆国で間もなく制定される日曜法は最終的な日曜法ではない。むしろそれは、地球上のあらゆる国が次第に教皇権のしるしを受け入れていくにつれて、一連の日曜法が順次制定されていくことの始まりを画するのである。

2023年7月に目覚めた人々は、彼らに立ちはだかる預言的な試練が聖霊の注ぎの期間中に起こること、そしてその注ぎの間に一方の群れは「油」を受け取り、もう一方の群れは「強い惑わし」を受けていることを理解しなければならない。「強い惑わし」という表現が現れるまさにその章に、強い惑わしを受ける者たちの主要な描写が見いだされる。そしてその章で、愛されるか拒まれるかする真理とは、異教ローマと教皇ローマの間の預言的關係を定義づける真理である。

321と538の預言的關係は、ペルガモの教会とテアテラの教会との預言的關係によって示されている。終わりの時代に、321とペルガモによって表される異教ローマはアメリカ合衆国の象徴であり、538とテアテラによって表される教皇ローマは現代ローマの象徴である。

321年の第一のローマは単一の権力体制であり、538年の第二のローマは、教会と国家の結合を体現する二重権力体制で、その關係の主導権は教会が握っていた。第三にして最後のローマ、すなわち現代のローマは、竜と獣と偽預言者から成る三重の権力体制である。

パウロは、異教ローマ（竜）と教皇ローマ（獣）との預言的・歴史的關係を理解しないのは、強い惑わしをもたらす真理に対する憎悪を露わにすることだと教えた。パウロを含むすべての預言者は、とりわけ終わりの時代を念頭に語っていた。だからこそ、パウロの

時代におけるこの二つの権力の関係は、終わりの時代の現代ローマにおける三つの権力の関係を表している。終わりの時代に竜・獣・偽預言者の三者連合を「形成」するその預言的關係を退けることは、強い惑わしを自分自身に確実にもたらすことにほかならない。

ユライア・スミスの「北の王」に関する独自解釈は、「結果」を生み出す「原因」となった。しかし、ローマをめぐる論争で誤った側に立つ集団は、原因から結果へと論理をたどることができない者として明確に示されている。スミスは、自身の「北の王」の誤った適用が、彼をして第六の災いをも誤って解釈させるに至る預言的な基盤を生み出すことになるとは見抜けなかった。そこには、キリストの義の衣を保つか失うかについての警告がある。

第二テサロニケ書におけるパウロの強調と同様に、ヨハネも黙示録16章の第六の災いにおいて、世界をハルマゲドンへと導く三つの勢力が何者であるかを理解する必要性を強調している。スミスによる北の王の誤った適用は、型と反型を正しく適用する能力の欠如の証拠となっている。

スミスは、パウロの著作で強く打ち出されている「十字架以前の時代における文字どおりの事柄が、十字架以後の時代における霊的な事柄を表している」という原則を、適用できなかったのか、あるいは適用しようとしなかったのか。この原則を注意深く正しく適用すれば、「北の王」が、終わりの時代における霊的な「北の王」を表す多くの象徴の一つであることは、容易に示される。セブンスデー・アドベンチストは他のどの人々よりも、預言が基礎としている主要な枠組みの一つがキリストとサタンの間の争いであることを知っているはずだ。キリストこそが真の「北の王」であり、サタンは偽の「北の王」として自らを現そうとし続けてきた。

コラの子らのための歌と賛歌。主は大いなる方、私たちの神の都、その聖なる山において、いとほめたたえられる。たたずまいの美しさにおいてすぐれ、全地の喜びであるシオンの山は、北の方にある、大いなる王の都である。神はその宮殿のうちにあって、避け所として知られている。詩篇 48:1-3

真の「北の王」の偽物を仕立て上げようとするサタンの企てには、地上における彼の代表としてローマ教皇を用いることが含まれている。サタンは反キリストであり、サタンの欺きの働きにおいてその代理人であるローマ教皇もまた反キリストである。

世の利得と名誉を確保するために、教会はこの世の有力者たちの好意と支持を求めるとして仕向けられ、こうしてキリストを退け、ついにはサタンの代表者-ローマの司教-に忠誠を誓うに至った。『大論争』、50。

アレクサンドロス大王の帝国の分裂に際し、ダニエル書第11章に描かれている歴史において最初の北の王となったのはセレウコス・ニカトルであった。彼の父アンティオコス はアレクサンドロスの帝国で影響力のある指導者であり、その息子であるセレウコスはバビロンのサトラップに任じられた。「サトラップ」とは総督のことで、アレクサンドロスの帝国が四つの地理的領域に分割されたとき、そのうち三つをセレウコスが掌握すると、彼は北の王となった。

スミスの独自の解釈と文法規則の無視により、彼は、終末におけるサタンの悪の連合を構成する最終的な諸権力は、霊的な力ではなく、預言の中で文字通りの権力として表されているのだと考えるに至った。したがって、彼は、最初の北の王、すなわちバビロンの総督であったセレウコス・ニカトルが、予言上の必然性から、近代の霊的バビロンを支配する力である最終的な霊的な北の王を象徴するはずだということを理解できなかった。

そして、七つの鉢を持つ七人の天使のうち一人が来て、私に話しかけて言った。「ここへ来なさい。多くの水の上に座している大なる淫婦に対する裁きを、あなたに示そう。地の王たちは彼女と淫行を行い、地に住む者たちは彼女の淫行のぶどう酒に酔わされた。」そこで彼は私を霊において荒野へ連れて行った。すると私は、緋色の獣の上に座している女を見た。その獣は冒流の名で満ち、七つの頭と十本の角を持っていた。女は紫と緋の衣をまとい、金と宝石と真珠で飾られ、手には金の杯を持っていたが、その中は忌むべきものと彼女の淫行の汚れで満ちていた。その額には、こう書かれた名があった——「奥義、大なるバビロン、遊女たちと地の忌むべきものの母」。私は、その女が聖徒たちの血とイエスのために殉教した者たちの血に酔っているのを見た。彼女を見たとき、私は非常に驚嘆した。ヨハネの黙示録 17:1-6

終末にバビロンを支配する力は教皇の教会であり、したがって彼女は霊的な北の王でもある。

黙示録17章の女（バビロン）は、「紫と緋の衣をまとい、金や宝石や真珠で飾られ、手には忌むべきものと汚れで満ちた金の杯を持っていた。…そしてその額には、こう書かれた名があった。『奥義、大なるバビロン、淫婦たちの母』」と描写されている。預言者は言う。「私は、その女が聖徒たちの血とイエスの殉教者たちの血に酔っているのを見た。」また、バビロンは「地の王たちを支配している大なる都」であると宣言されている。黙示録17:4-6, 18. 幾世紀にもわたりキリスト教世界の諸君主の上に専制的な支配を維持してきた権力はローマである。紫と緋の色、金と宝石と真珠は、傲慢なローマの教皇座が誇示してきた、王侯をも超える壮麗さと華美を鮮やかに描き出している。そして、キリストの信徒をこれほど残酷に迫害してきたその教会ほど、「聖徒たちの血に酔っている」と真実に言い表せる権力はほかにない。バビロンはまた、「地の王たち」との不法な結びつきという罪にも問われている。ユダヤ教会が淫婦となったのは、主から離れ、異教徒と同盟したことによってであり、そしてローマも、世の権力の支持を求めることによって同様に自らを墮落させたため、同じ非難を受けるのである。大なる論争、382。

総督は王であり、イザヤによれば、王は王国であり、また王国の首都でもある。

アラムの頭はダマスコ、ダマスコの頭はレツィン。六十五年のうちにエフライムは打ち砕かれて、もはや民ではなくなる。エフライムの頭はサマリヤ、サマリヤの頭はレマリヤの子。もしあなたがたが信じなければ、必ず堅く立つことはできない。イザヤ書 7:8、9

イザヤの証言によれば、2023年7月に預言的な試しの過程に目覚めた預言を学ぶ者は、確立されることを望むなら「頭」の預言的象徴を認識しなければならない。必要とされるときに「頭」の象徴を認識して適用しないなら、彼は確立されない。信じない者は確立されない。ゆえに、イザヤは終わりの日の礼拝者を、確立される者と確立されない者という二

つの類に区別している。それは「油」を持つ者と持たない者という、同じ二つの類である。

確立され、油を持っている一つの集団は、2023年7月に明らかにされ始めた真夜中の叫びのメッセージを受け入れるか、あるいは第二テサロニケの強い惑わしを受ける。彼らの試練は、獣の像の形成、すなわち獣がどのように形成されるのかという点であり、それが暗黒時代の教皇的な獣なのか、アメリカ合衆国によって形成されるその像なのか、あるいは世界をハルマゲドンへ導く三重の同盟なのか、ということである。これには、「頭」「王」、すなわち三重の同盟を構成する他の二つの権力を支配する者が教皇権であることを認識する必要性が含まれる。

「頭」、すなわちユダの首都はエルサレムであり、そこは主が御名を置くために選ばれた都であった。

ソロモンの子レハブアムがユダで王となった。レハブアムは王となったとき四十一歳で、エルサレム、すなわち主がイスラエルのすべての部族の中から御名を置くために選ばれた都で、十七年の間治めた。彼の母の名はアンモン人の女ナアマであった。列王記上 14:21

キリストとサタンの大いなる争いにおいて、キリストが御名を置かれる首都はエルサレムであり、これに対抗するサタンの偽物は、終わりの日々におけるあの大いなる都である霊的バビロンを表す、文字どおりのバビロンの都であった。サタンは、神の都と政庁の偽物として、その名を頭に記す。そこに住む王は、地の王たちと淫行を行う淫婦どもの母である。淫婦どもの母は教皇権であり、その娘たちは墮落したプロテスタント諸教会で、その筆頭の墮落した背教の教会はアメリカ合衆国の背教的プロテスタントである。

その背教したプロテスタントは地の獣のプロテスタントの角を表し、彼らは1798年に封印が解かれた預言的メッセージを退けて以来、彼らの母と結びついている。それに対応する共和主義の角は、国際連合（黙示録第17章の十人の王）との関係を通して、地の王たちと結びついている。世界をハルマゲドンへ導く三重連合は、その名の記された頭によって表されている。また、霊的な現代ローマは霊的な現代バビロンである。その「頭」は教皇権である。

最初のもは最後のものを表す。そして、あなたがダニエル書2章を、ミラー派がそうしたように四つの王国を表すものとして解釈するにせよ、あるいは終わりの時代に明らかにされたように八つの王国を表すものとして解釈するにせよ、最初の王国は文字通りのバビロンであった。ミラー派は、最後は文字通りのローマだと教えるだろう。バビロンとローマは相互に置き換え可能な象徴である。なぜなら、それらは預言の系譜における最初と最後だからである。

終わりの時代には、文字通りのバビロンの第一の王国は、第八にして最後の王国、すなわち霊的な現代のバビロンであり、また霊的な現代のローマでもあるものを表している。ダニエル書二章において表されている二人の証人に基づけば、バビロンとローマは相互に置き換え可能な象徴である。

教皇の淫婦が、その額に「奥義のバビロン」と記された名を持つ姿で描かれるとき、それはまた「奥義のローマ」をも指し示している。預言的な「奥義」とは、その内に示されている真理の深さを理解することが不可能なほど深遠な真理を表しており、とりわけ聖霊の働きなしにはその深みを理解することはできない。しかし、聖書的な「奥義」はまた、その奥義に関連して啓示される事柄が、試験に合格しようとする者にとって必須の理解であることをも要求する。だからこそ、黙示録の二人の証人は、現代のローマを理解する必要性を強調している。

ここに知恵がある。思慮のある者は獣の数を数えよ。それは人の数であり、その数は六百六十六である。ヨハネの黙示録 13:18。

「知恵」は獣の数を理解している。それは人の数であり、その数は六、六、六である。「罪の人」は獣の頭である。知恵は終わりの日の賢い乙女の属性であり、また終わりの日における知識の増大を理解する者の象徴でもある。理解しない者は愚かな乙女であり、悪しき者である。彼らが理解しない「知恵」は、預言的必然として、最後の預言的試練の文脈にあるものでなければならない。というのも、賢い乙女と愚かな乙女が存在するのはこの時だからである。彼らは「六、六、六」を理解しなければならない。さらに、ヨハネは黙示録第十七章において、終わりの日の「知恵ある心」も示している。

そして、ここに知恵ある者の思いがある。七つの頭は、女が座っている七つの山である。また、七人の王がいる。五人はすでに倒れ、一人は今いる。もう一人はまだ来ていない。やがて彼が来るときには、短い間だけとどまらなければならない。そして、かつてはいたが今はいない獣は、八番目であり、七人のうちの一人でもあり、滅びに至る。黙示録 17:9-11

「『六、六、六』という数を理解する知恵を備えた『心』は、『キリストの心』を得た賢いおとめである。」

いったい、だれが主の御心を知り、主に教えることができたのか。しかし、私たちはキリストの心を持っている。コリント人への第一の手紙 2章16節

賢い乙女の階級はキリストの心を持ち、愚かで邪悪な乙女たちはキリストの敵の心を持っている。

真の光が道徳的暗闇のただ中で輝く時が来た。第三天使のメッセージは世界に向けて発せられ、人々に対し、額または手に獣の刻印、あるいはその像の刻印を受けないよう警告している。この刻印を受けるとは、獣が下したのと同じ決定に至り、同じ思想を唱えることであり、神の言葉に真っ向から反することである。『Review and Herald』1897年7月13日。

獣の像の形成は、たとえに登場する処女たちにとっての最後の試練であり、賢い処女たちはキリストの心を持っている。というのも、彼女たちは自分の意志を聖霊の導きに服させ、キリストと同じ決断に至っているからである。賢い処女たちにおけるキリストの像の形成は、愚かな処女たちにおける獣の像の形成と対照的である。愚かな処女たちは獣と同じ決断に至る。反キリストの正しい識別という試練の核心で混乱したからである。反キリストとは、偽りの北の王であり、現代のローマの長である。

「言葉についての理解が混乱し、反キリストの意味を見抜けない者は、必ずや自らを反キリストの側に置くことになる。」 クレス・コレクション、105.

獣の像の形成として表されている試練の時に、愚かな乙女たちは、神のことばの理解において混乱に陥る。彼らの混乱は、神の預言のことばを誤解していることに基づいており、現代ローマの正しい意味を見抜けないために、強い惑わしを受け、獣と同じ決断に至り、神のことばに真っ向から反して同じ教皇主義的な思想を唱え、自らを反キリストの側に置く。

このカテゴリーの次の記事で、これらの考察を続けていきます。